



▲絵本「うみのしくみ」の中より抜粋 | 荒井 真由香

卒業制作としてこの絵本を作りました。小さな子供たちに、自然や環境問題に興味関心を持ってもらうことを目的とした絵本です。人間の行ったさまざまな環境破壊によって、絶滅の危機にさらされている生物が数多くいます。子供たちが、この絵本を読んで、生物多様性が壊されているという現状を知り、自分が環境保全のために何ができるのかを考えるきっかけになってほしいです。



共立がいま進めている、 環境学習への取り組み

近年、日本では“環境”問題が改めて注目されています。

共立女子大学・共立女子短期大学では、環境問題の諸相をテーマにした授業をはじめ、自然科学系、人文・社会系、実学・スキル系などのさまざまな学びを組み込んだ、すそ野が広い、特色のある環境学習を行っています。

本学の環境・防災に関する授業・取り組みの一部をご紹介します。

Message | 学長メッセージ



共立女子大学・共立女子短期大学
学長 入江 和生

近年、世界中で大きな自然災害が頻発しています。自然が人間の手に負えないものになってきているという印象があります。でも、もともと、人間こそ自然にとって手に負えないものであり続けてきたのです。

人間も自然界の一員ですが、ややもするとその自覚が薄れてしまうところに問題があります。環境問題とは、つまるところ、いかにして人間を自然界の一員としての定位置につけるか、ということなのでしょう。

本学は以前から環境問題にかかわる授業が多く、本学学生は「自然に」環境問題についての見識を深めています。これからは、それをもう少し意識的にやりたいと考えています。

環境教育は、深い意味での人間教育なのです。

Report | 学生の取り組み

ミツバチが繋ぐ人の輪

家政学部 児童学科 鈴木 さくら

都内で生まれ育った私には、実際にミツバチを見る機会がほとんどありませんでした。ゼミの活動として銀座ミツバチプロジェクトの見学をさせていただくことになり、都内でそのような活動が行われているということを知りました。まさか銀座でハチミツが採れるとは思っていませんでしたし、銀座の街をミツバチが飛んでいるなんて想像もつきませんでした。間近でミツバチを見ることに期待を持ちながらも、初めてのことで少し不安もありました。

いざ見学がスタートし、防護用の帽子をかぶって屋上へ向かうと、さっそくミツバチが何匹か飛んでいるのが目に入りました。巣のある奥の方へ進んでいくと数えきれないほどのミツバチが飛び交っていました。巣に入ったり、出てきたかと思ったら屋上から銀座の街へ飛んでいったりと忙しそうにしていました。ミツバチの生態や役割などについて詳しくお話を伺うと、今まで何も知らずにハチミツを食べてきたけれど、ミツバチが一生懸命働いて採れたものだとは分かり、応援したくなるような気持ちになりました。また、それが銀座のビルの屋上で行われていると考えたと改めて驚かされました。

その後はテラスへ移動し、採れた時期や花の種類が異なるハチミツの食べ比べをさせていただきました。どれも味や香りが全く異なり、同じ巣で採れたハチミツがこんなにも違う性質を持った物になることには大変驚きました。テラスではBBQやビアガーデンを開催することもあるというお話を聞き、ビルでは養蜂だけでなく様々な活動を行っていることがわかりました。

田中氏による講演では、銀座で採れたハチミツを使い、お酒やお菓子、美容品などの製造・販売も行っているというお話があり、こんなにも活動の幅を広げることができるハチミツはとても奥が深いと感じました。商品を手にした人が銀座ミツバチプロジェクトを知るきっかけにもなり得るのではないかと思います。ハチミツだけに留まらずサツマイモやハーブの栽培なども行っていたり、様々なお店や企業とコラボレーションをしたりしているというお話を聞き、常に色々な方向にアンテナを立てて積極的に銀座ミツバチプロジェクトの活動に取り入れていく姿勢には感銘を受けました。

銀座でのイベントに参加したり、全国各地の方々と交流をしたり、都会では特に薄れてきている人と人とのコミュニケーションを大切に活動を行っていると感じました。銀座という都会から始まった活動が地方へと広がっていき、地域コミュニティとしての役割をも担っていると感じました。私も様々な活動に積極的に参加し、地域の活性化に少しでも貢献していきたいと思いました。



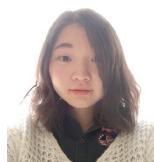
Report | 共立アカデミーレポート

Report 01

「江戸・東京 文学と歴史のブラリ旅 ~谷根千~ レポート」

国際学部 立花 真衣

今回「江戸・東京 文学と歴史のブラリ旅」に参加させていただき、現在の東京の街にもまだ色濃く江戸という文化が根付いており歴史というのを深く考えさせられました。特に谷中墓地という場所にはたくさんのお墓があるというのは初めて知ったことだったのでとてもいい勉強になりました。



今回の講座では文芸学部の内田保廣先生の事前学習からはじまりました。事前授業では「歌川広重」の「名所江戸百景」の絵をもとに基礎知識を学びました。江戸時代様々な人や物にとって現在の日暮里があるということを理解することが出来ました。

旅の中では先生の解説とともに一つ一つ歩いて回りました。そこでは実際に見て聞くことで事前授業では気づけなかった江戸時代の名残がよくわかりました。特に印象的だったのが谷中墓地です。谷中墓地は「長谷川一夫」、「徳川家」、「渋沢栄一」、「徳川慶喜」、「横山大観」、「鳩山一郎」、「高橋お伝」、「川上音二郎」等の墓へ行きました。ほかにも有名な文豪や詩人の墓などがありました。お墓をじっくりと見るということ今まで私はしたことが無かったので今回谷中墓地をじっくり見ること、歴史人物を身近に感じることが出来ました。

今回この講座を受けてみて自分が今まで生きて中でも江戸という時代は少しだけですが残されていて、残された歴史を考えながら街を歩いてみるとまた違った江戸時代という時代が見えてきて江戸時代という時代の深さや歴史を身に染みて感じることが出来ました。これからも普段歩いている中で現代に残された江戸時代というものを探しながら歩いていこうと思いました。



(ブラリ旅コース)

日暮里駅
↓
紅葉坂
↓
天王寺
↓
天王寺五重塔の跡地
↓
谷中墓地
↓
笠森稲荷
↓
大圓寺
↓
菊見せんべい総本店
↓
森鷗外記念館
↓
根津神社

Report 02

「JAL工場見学SKYMUSEUMレポート」

国際学部 山本 里奈
尾島 ゆりえ

JAL工場見学に参加いたしました。私は予てから航空会社の工場見学に興味があり、共立アカデミーを利用してJALの工場見学に参加できるとのことで迷わず参加を決めました。まず初めに元客室乗務員としてご活躍されていた職員の方から、JALが安全なフライトをするために、また環境を守るために行っている活動についてビデオと共にとても楽しい解説で説明してくださいました。実際に現場で働く方々から貴重なお話を聞くことができ、内容はとても興味深く勉強になるものばかりでした。展示場では飛行機の仕組みについて学び、歴代の客室乗務員の制服を見学しました。特に、この見学での一番の思い出は、実際にJALの客室乗務員(またはグランドスタッフ)の制服を着て写真撮影を行ったことです。私は幼い頃から客室乗務員は憧れの存在だったので、少しでも近づけたような気持ちになれて本当に嬉しかったです。格納庫内では、普段決して見ることはできない作業現場を見学することができ、さらに政府専用機にも遭遇することができました。格納庫内で見える機体は想像以上の迫力で、思わず圧倒されました。実際のフライトに使われる機体についてそれぞれの違いなど詳しく教えて頂いたので今までに無い観点で機体を観察できました。アカデミーを通じて大変貴重な体験をさせていただけたことを大変嬉しく思います。来年もまた参加したいと思えるとても素敵な見学ツアーでした。今回参加することができ、モチベーションの上がとても濃密な1日になりました。またこのような機会があれば是非参加させていただきたいです。





家政学部
建築・デザイン学科
林田 廣伸 教授

1976年多摩美術大学大学院美術研究科修了。
外資広告代理店のアートディレクターとして21年間勤務。
毎日広告デザイン最優秀賞、ニューヨークフィルムフェスティバル銅賞、ACC賞などの各種広告賞を受賞。日本デザイン学会、日本広告学会所属。現在も公益性のある事業やNPOのポスター、マークなどの制作を行っている。

主な担当科目
グラフィック・デザイン演習、セミナー、デザイン概論ほか



MSC(海洋管理協議会)と林田ゼミ協働展示・発表会
写真は2012年イオン津田沼店特設会場にてMSC(海洋管理協議会)のポスター発表の様子。MSCポスター展示はイオンの他、エコプロダクツ展、スーパーマーケットトレードショウ等。また、これまでに国際NGOコンサベーション・インターナショナルとは東京・銀座ソニービル、世界銀行情報センター、JICA地球ひろば、丸の内・住友信託銀行、スターバックスコーヒージャパン銀座マロニエ通り店、三菱地所丸の内さえずり館等で展示と発表会を行っている。

グラフィック・デザインの手法を使うことによって、より環境問題を理解していく

Education policy 生活者の目線で「環境」を考え、メッセージを発信すること

家政学部は人間がいかに生きていくかを探る場であり、そのために必要な知識や技術を学生が習得できるよう、私たち教員は道筋を立てていかなければならないと思っています。私はグラフィック・デザインという手法を通して、もの創りの目的を学生たちに理解させ、どのようなものを創り、どうメッセージしていくべきなのかを体感させる責任があると感じています。

2012年からは、国際NPOのMSC(海洋管理協議会)と協働でポスターの制作と発表を行っ

ています。テーマは「どうしたら水産資源を守れるの?」です。環境問題の難しさは、ほとんどの人が環境問題には気づいているけれども、行動を起こすのが難しいことです。「今、私たちに何ができるのか。」学生の素朴な等身大の視点でポスターを制作していくことで、展示作品を見てくださる皆さんとともに環境問題のキャッチボールができるのではないかと考えています。家政学部で学ぶ環境とデザインには、そういった大きな目的と使命があると考えています。

Main class 広告制作のメソッドを活用して、公益性のあるテーマに取り組む

2003年から、地球温暖化や、水と衛生など、環境をテーマにしたグラフィック・デザインの取り組みをゼミで続けています。2005年からは国際NPOのCIと生物多様性をテーマに、2012年からはMSC(海洋管理協議会)と協働展示と発表を行っています。

テーマからどのようにしてアイデアを導き出さるか。それはキーメッセージとキービジュアルをしつかり構築することです。そしてそれを表現するデ

ザインの技術が必要です。これがなかなか難しいのですが、これらを導き出す広告制作のメソッドを用意して、学生に理解させ、活用することにより、単なる感覚ではない作品ができると信じています。作品制作のプロセスは彼女たちの環境意識を向上させます。この大学を卒業して、社会に出ていった時、また家庭をもった時にも、環境に対する気持ちが持続し行動につながっていくことを、私はいつもイメージして授業に取り組んでいます。



国際学部
国際学科
細野 豊樹 教授

1994年東京大学大学院法学政治学研究科修了。公共政策学修士(MPP)、法学修士。研究分野は政治学、アメリカ研究、環境学など。環境庁での行政経験と専門知識を生かしながら、アメリカ合衆国の環境政策や地球環境問題について、研究・分析を行っている。またインターネットなど、情報技術が政治に与える影響についても研究。最近の主な業績に「気候変動の科学をめぐる政治——アメリカと国際機関における政策論議のモデル化」、「アメリカ現代政治の構図」、「オバマ政治を採点する」などがある。

主な担当科目
環境・科学の諸課題、政治分析の基礎、アメリカ文化論、地球環境論ほか



住民の要求で作られた市街地再開発事業の模型

身近な環境と関わる公共政策の策定において、行政および事業者は、複雑な計画を市民に分かりやすく説明する責任を負う。写真は、横浜市北部の駅前再開発事業の模型。イラストでは不十分だとする住民意見に応じて作成された。

環境問題についての知識を体系的に伝え、判断の基準を養う 自分が住む街の環境を調べ、参加型の意識を育む

Education policy 環境リテラシーの意義、争点につき判断する市民としての教養

3.11以降、日本における環境・エネルギー政策は曲がり角にきています。こうした中で、市民からの政策へのインプットが、今までになく重要です。真の「政治主導」とは、官僚任せが政治家任せになることではありません。市民の声が、政治と行政を動かすことなのです。

政治主導が強くなっていくと、市民の環境リテラシーがますます大事になります。地球温暖化

対策にしても、原子力の安全にしても、賛否両論のさまざまな意見が飛び交います。このため、だれが言っていることを信用できるかを、市民が判断する教養が求められるのです。

共立女子大学では、こうした要請に対応すべく、理科系と文科系の専門家が、学問の専門性、体系性を保ちながら、わかりやすい環境学習に取り組んでいます。

Main class 身近な環境問題から入って、知識を広め掘り下げ、自分の考えを持つ

私の授業では、典型7公害(大気汚染、水質汚濁、騒音など)を始めとする基本を、環境の基準をめぐる科学と絡めて、国際比較も交えながら、わかりやすく講義するよう努めています。教養教育科目は、3・4年生にも受講対象なので、わかりやすさだけでなく、密度が高い内容を盛り込むことにもこだわります。近年、福島第一原子力発電所事故による放射線の健康影響も取り上げ

ていますが、専門家の意見が分かれる難しい問題です。授業では学生にさまざまな論点からの記事を配り、判断の難しさを伝えていきます。また、問題意識、参加意識を高める観点から、自分たちが住む街の環境について調べて書くレポートを、毎年課しています。身近な環境がテーマなので、学年・学部学科を問わず、読み応えのあるものが多くて嬉しく思います。

自分たちが日々、暮らしている“環境”を意識させることで、 社会の仕組みへの興味と自主的な行動力を養う

Education policy 街の話題、ファッションへの興味から「環境への気づき」を育む

生活科学科では、生活に関する実践的な知識・技能の習得を養成目的の一つとしています。私たちに身近な衣服、生活道具や空間は、とりまく環境とともに変化するという視点から、歴史や風土、経済や世界情勢といった社会環境が生活に影響を与えることを、まず理解してもらいます。同時に、演習や学外授業を通じて、地球や自然環境

といった大上段の環境だけが対処すべき問題ではなく、日々の生活や人々の装い、街や地域などの、より身近な環境について考察する必要性を教えます。ライフスタイルを変えることで解決できること、またその可能性を、学生一人ひとりが自発的に考え、行動できる主体になってほしいと考えています。

Main class 流行に流されないために流行を知る。環境とは何かも自分で考えていく

「生活デザイン演習」では、彼女たちに身近なスタジオジブリのアニメを題材に、環境を考える授業を進めています。『もののけ姫』では、人間が生み出した科学技術が森林や動物を消滅させてしまうという、自然と人間の相克がテーマになっていますが、娯楽として見てきたアニメの中で、実は語られていた自然破壊の現実を、自分たちはどう受け止めていくべきなのか。彼女たちの興味や感じたことの視点に立って授業を進めます。

教養教育科目の「デザインの現在」では、近代化とデザイン様式の変容を扱いますが、消費者と

して、時には生産者として活動する私たちが、現代社会の根底にあるデザインと消費の関係を考えるにあたって、ファストファッションと流行の問題や、「あなたのTシャツはどこから来たのか」といったグローバル社会を扱ったものを題材にします。

また、物理学者として著名なエイモリー・ロビンズの『分散型エネルギー社会』なども紹介し、直面しているエネルギー問題を中心に、環境デザインの重要性について考察を進めています。



短期大学
生活科学科

渡辺 明日香 教授

1996年共立女子大学大学院家政学研究科修了。2012年首都大学東京大学院人文科学研究科修了、博士(社会学)。専門は現代ファッション・色彩・生活デザインであり、若者文化・ファッションやデザインをめぐるコミュニケーション・情報メディアとかかわりなどを研究している。また、1994年より実施しているストリートファッションの定点観測をもとに、人々や街をとりまく環境の変化を実証的に捉えている。主な著書に「ストリートファッション論」【東京ファッションクロニクル】などがある。

主な担当科目

生活デザイン演習、デザインの現在、ファッションデザイン論、色彩学、身体メディア実習 ほか



学生が親しみやすいDVD、テキスト

環境問題を実感するため、視覚的な映像作品を授業で紹介している。ファストファッションをテーマに、デザインする側や消費する側だけでなく、生産する側に焦点を当てた「女工哀歌」や「ザ・トゥルー・コスト」は、学生たちにリアルに響いている。

地球環境との関わりの中で、生命はどのように誕生して進化し、 私たち人類はどのように生かされているかを学ぶ。

Education policy 「食物」と「健康」について生物学の視点で取り組む

食物栄養学科では、「食物」と「健康」という2つの視点からカリキュラムが組まれ、人々の豊かで健やかな食生活を実現するための知識や技術を修得することができます。私たち人間の身体は、およそ37兆個の細胞でできていますが、肉や魚だけでなく、野菜や果物もその生物の細胞からできています。すなわち、私たちが毎日食べている食物のほとんどは、生物の身

体そのものなのです。日常生活で欠かせない食事について、生物学の視点で眺めてみると、私たちが毎日食事をする意味だけでなく、生命に深く関わる地球環境の重要性が理解できます。発見されているだけでも100万種類を超える動植物が生きる地球環境との関わりの中で、私たち人間はどのように生かされ、生きていくべきかを学んで欲しいと思います。

Main class 地球と生命の関わりに重点をおいて考えていく

地球が誕生して46億年。その永さが実感しにくいので、46億年を1年間のカレンダーで考えます。そうすると、地球に最初の生命が誕生したのが2月頃、私たち人類の誕生は、12月31日午後11時35分頃となります。つまり、地球の歴史の中で、人類の足跡はたった25分間しかない。このカレンダーでは、およそ150年が1秒という計算になり、私たちの一生は0.5秒間程度です。人類はまったくの新参者で、ちっぽけな存在なのです。しかし、たった1個の細胞から始まった生命は、35億年という長い時間をかけて、およそ37兆個の細胞をもつ人類にまで進化し、その生命の連続性はこれからも続くはず。ここで「…はずです」と述べたのは、「私たち人類が絶滅しなければ…」という仮定の上に立っているからです。

35億年の地球生命の歴史は、その時々々に繁栄した生物の絶滅の歴史でもあります。近年、持続可能な社会を維持する上で、地球温暖化の防止が世界共通の重要課題の一つになっています。しかし、地球の長い歴史の中では、温暖化や寒冷化が何度も繰り返され、その度に様々な生物が大量絶滅しています。こうした地球環境の大変動は、巨大隕石の衝突や火山の噴火によるものだけでなく、その時代に繁栄した生物自身の営み(繁殖過多・共生破壊など)がもたらしたものもあるといわれています。つまり、現代に目を向けると、人類の様々な経済的活動などが、温室効果ガスを増やし続けていることも、際限なく繁栄しようとする生物の営みの一つであるともいえるのです。

家政学部食物栄養学科
生物学研究室

川上 浩 教授



1982年：東京大学農学部農芸化学科卒業。1988～90年：University of California, Davis, Department of Nutrition。1993年：博士(農学)東京大学。25年間の食品企業研究所勤務を経て、2007年に共立女子大学へ。食品に由来する生理活性成分や微生物の機能性と安全性を中心に、生物学的観点からの教育と研究に取り組んでいる。2009年：東京大学大学院農学生命科学研究科非常勤講師。2013年：「日本酪農科学会賞」受賞。

主な担当科目

生物学、基礎生物学、分子生物学、生化学、生物学実験、生化学実験、食生活素材論、食品学特論、食品学演習、ほか



生体成分精製装置

生体成分を変質させることなく分離するための装置。食物や人体に含まれる生理活性成分や環境汚染物質を、そのままの形で分離して解析することができる。



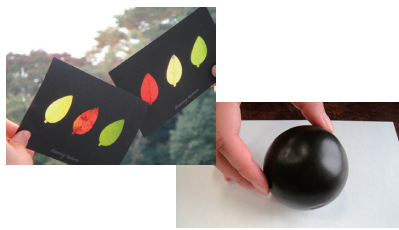
家政学部
児童学科

田代 幸代 准教授

専門は、幼児教育学・保育学。国公私立幼稚園の教諭、管理職を経て、2016年に共立女子大学へ。前任園では、鶏や家鴨を飼育しコンポストで堆肥を作り、家庭や地域と連携して米や野菜を作る実践をしていた。収穫物は誕生会のおやつや餅つきなどで食し、子どもが生命の循環を実感する一連の活動は「環境教育指導資料集」に掲載した。子どもが主体的に環境にかかわって学ぶ内容や計画、教育方法について研究し、質の高い保育者の育成に取り組んでいる。

主な担当科目

「子どもと環境」「保育・教育課程論」「保育・教職実践演習」「生活科教育」「教育実習」他



学生自身の体験から環境を捉える

授業では、「身近な環境マップ」「光る泥団子」の作成や、ネイチャーゲーム等、周囲の環境を学生自らが感じながら、幼児期の教育で重要なことは何かを考えていく。

私たち自身の存在も“環境の一部”であることを知り、環境とかかわりながら子どもが育つ意味を学ぶ

Education policy 子どもたちの幸せな未来を創る

児童学科では、次世代を担う子どもたちを育成するために、現代の保育・教育課題を踏まえて総合的な実践力を身につけることを目指しています。子どもの心身の発達を、生涯発達を見通した基礎部分として捉え、子どもは周囲のものや人などの環境にかかわり、それを広げたり深めたりすることから学ぶことを理解していきます。保育現場の見学や、保育・教育実習を段階的に進めて実践力を身につけ、専門

的な知識と技能を獲得していきます。保育者も子どもが育つ環境の一部であり、子どもが主体的に学ぶ教育を実現するためには、適切な環境を構成することと資質能力の高い保育者の存在が欠かせないと考えます。子どもたちの教育にかかわることは、“未来を創る仕事”でもあるのです。こうした使命感と責任感をもって、学生一人一人が自分の力をつけていってほしいと願っています。

Main class 子どもが育つための環境と保育者の役割について考える

「子どもと環境」では、学生自身の体験を通して子どもを取り巻く環境を考えるようにしています。例えば、自宅から大学までの通学路で目にする自然物を写真に撮り、マップにまとめます。思いもかけないところに花が咲き、鳥の声に気づくなど、自然環境への意識が変わります。光る泥団子を作る課題からは、場所による土の色、質の違いや、子どもが土に触れる意味に気づいていきます。こうした課題から、学生は自然の多様性に気づくとともに、互いのマップやレポートを基にしたディスカッションによって、私たち自身の多様性にも気づいていきます。さらに、子どもの姿を映像等で視聴し、実際の保育

場面の分析から理論の構築を進めています。どのような遊具や道具、教材があるのか、数はどのくらい用意しているのか、空間や施設設備の使い方などの物的環境への理解も深めています。

豊かな感性で子どもとかかわる保育者となるために、学生自身が感性を磨き、命の大切さや尊さ、ESDの理念を学ぶ必要があります。自然に親しみ自然を感じる心、身近な環境への好奇心や探究心、自然物を自らの生活や遊びに取り入れていく力など、子どもが身につけることを支えられるよう学んでほしいと考えています。



短期大学
生活科学科

岡田 悟 教授

1983年東北大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程満期退学。専門は近世住宅史。人の生活の容れ物である住宅からは、生活をとりまくインテリア空間や建築空間を通じて、多くのことを学ぶことができる。現在よりも科学や技術が未熟であった時代には、人は周囲の環境に敏感で、環境と上手に付き合いつながりながら生きてきた。現在においてもこうした知恵を活かした空間づくりに取り組んでいる。

主な担当科目

インテリア設計演習、インテリアCAD基礎演習 ほか



手描きとCADを使用した授業

手描きとコンピュータを使ったCAD(コンピュータ支援設計)とは、車の両輪のような関係であり、両方を共に学習するのが生活科学科の伝統。また、テキスト類は「住まいとインテリアデザイン」「建築設計資料集成」といった基礎的な知識やデータが載せられたものを用い、授業ではその応用性を高める方針である。

日々の暮らしを支えるインテリア空間こそ“環境”そのものであるという認識に基づいて、自分とその周囲を検討、考察する

Education policy 異なる価値観のぶつかり合いが新たな地平を生み出す

生活科学は生活者の学問であり、生活者は生産者と消費者の両方の性格を共に持つものです。つまり、生産者はしてあげる側の、消費者はしてもらおう側の人間といえます。今まで学生諸君はしてもらおうが多かったと思いますが、今後はしてあげることができれば社会で信頼や収入を得られません。

学生時代はしてあげる人になる準備期間といえ、してあげる価値観を獲得する時期です。高校までとは異なる教育の中で、どのような価値観を発見すること

が出来るでしょうか？

環境の問題に限らず、従来思い描いていたイメージとは異なることを授業で聞いたりすることと思います。さらに、何を言っているのかさっぱり分からない先生がいればラッキー。自分とはかけ離れた価値観を持っているが故に分からないのであって、つまりは、自分にない価値観の宝庫なのです。異なる価値観をぶつかり合わせ、大いに混乱して新たな地平が開けるのです。

Main class 環境を空間という形で設計し、表現する孤独で厳しい作業に挑む

学生に「インテリアって何のこと？」と尋ねると「家具のこと」「カーペットやカーテンのこと」「壁飾りや置物のこと」などの答が返ってきます。いずれも間違いではありませんが不十分です。一方、「インテリアの反対語は？」と尋ねると答えられる学生は少数です。正解はエクステリア。門扉やフェンスを指します。

インテリアの領域が文字通り家具から置物までの「内部の」即ち「室内の」ことから扱うという時代は過ぎ去り、今は人が発生させる空間を扱うという考えが主流です。扉まわりは人が開けて通って閉めるという

点で人が発生させる空間であり、建物内であっても屋外にあっても間違いなくインテリアの要素です。

こうした新しい概念に立てば「インテリア設計演習」、「インテリアCAD基礎演習」はまさに環境を空間という形で設計し、表現することに他なりません。同時に、設計や表現については、その意味は教えられませんが、設計案、表現作品の作り方のハウツーはありません。従って、各自が知恵を絞り出して作り上げる他はなく、挑戦的で厳しい作業であることを肝に銘じておく必要があります。

環境問題を正しく理解し、安全・安心・快適な生活を実現するためにはどうすればいいのか考察する

Education policy 自然環境を利用したり、制御したりしながら、安全でより快適な空間をつくる

建築・デザイン学科では、人が生きていくために必要な生活の場を構成している『空間』や『モノ』などを総合的にとらえ、安全・安心・快適な生活を実現するために、専門的知識・実践力を身につけることを目的の一つとしています。建築をとりまく空間は多種多様ですが、特に人間にとって快適な空間を創造することは極めて重要であり

ます。様々な環境問題についても、その本質を理解し、解決できる能力を養うことが大切です。自然環境を利用したり、制御したりしながら、安全でより快適な空間をつくるために必要な知識や技術を講じ、私たち一人一人が何をすればよいのかを真剣に考えてもらえたらと思っています。

Main class 環境問題について知識と技術を得た上で、実測して体感し、自ら考える教育を目指す

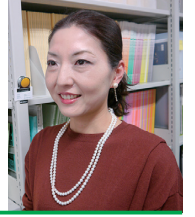
「環境工学」の授業では、安全でより快適な空間をつくるために必要な知識や技術を得ることを目的としています。主として「気候」「日照と日射」「光環境」「音環境」「熱環境」「空気環境」について、その原理、内容、方法、課題などの観点から論じ、建築を計画する上で欠くことの出来ない要素技術を身につけていきます。

また、「建築総合演習」の授業では、対象となる「空間」や「モノ」を数値化し、客観的な指標と比較・検討

する演習を行っています。実際に環境測定機器(温度・湿度計、赤外線放射温度計、普通騒音計、二酸化炭素濃度計、においモニター、グリーンチェッカー等)で様々な場を測定、考察し、環境問題を身近な問題として体感させることを重視しています。調査、見学、実験等を通して、一般の講義形式の授業では得られない総合的な技術や知識を身につけられ、資料や映像教材なども利用しながら、学生たちの関心や理解を高める授業に取り組んでいます。

家政学部
建築・デザイン学科

藤本 麻紀子 教授



2001年、横浜国立大学大学院工学研究科修士、博士(工学)。専門は環境工学、環境心理学。環境心理学の視点から人間の心理と景観との関係を調査している。特に「感覚時間」が場所と人との交感作用を計測する尺度となりうるかをテーマにしている。論文に「休息空間における人と場の関わりと感覚時間に関する基礎的研究」「千代田区における公園の活動実態調査」等がある。

主な担当科目

「環境工学」「建築設備」「環境心理学」「建築総合演習」「特論環境デザインII」他



環境問題を体感できる機器

「建築総合演習」では、環境測定機器(温度・湿度計、赤外線放射温度計、普通騒音計、二酸化炭素濃度計、においモニター、グリーンチェッカー等)を利用して、様々な場を測定し、身近な環境問題を体感させている。

環境問題を私たちの生活の一部であると自覚し、日々の生活を見直すと共に、持続可能な生活の実現を図る

Education policy 日々の生活から地球の姿を見る

生活科学科では、私たちが一人の人間として自立し活躍するために、生活に関する知識・技術を実践的に身に付けることを目的の一つとして掲げています。人間が生活するためには、環境への負荷はやむを得ないことではありますが、温暖化が深刻化する今、私たちは環境に無駄な負荷を与えない生活を送るための術を養うことが必要であると考えます。

食・健康コースでは、日本が飽食の時代であるが故に、失っていくものの大きさを地球規模で考えられるように指導しています。学生一人ひとりが、食生活を充実させるだけでなく、食と環境との関わり方を考え、生活の中で意識的に環境を考えた行動ができるようになって欲しいと考えています。

Main class 自らの身体、心、取り巻く環境を豊かにする「食」について理解する

地球規模の環境問題では、地球温暖化による環境破壊が取り上げられています。地球温暖化の原因である温室効果ガスの中でも、人為的要因の大きい二酸化炭素について、削減が求められています。わたしたちが生活する上で排出される二酸化炭素は、家電製品・自動車・キッチンなどが由来となります。

「環境調理学」では、食材の特徴を理解し、私たちの身体や心を健康にするための調理法について考えながら授業を進めます。豊かな食生活を提案するとき、食事の見た目、おいしさ、栄養だけでなく、環境にどのように配慮し調理できているかというのも重要なポイントです。環境に配慮した調理と

は、二酸化炭素排出量をいかに減らし調理できるかということになります。食材は、生産・輸送・調理・廃棄の工程を経て、料理として食卓に提供されます。講義では、どのような点に注意し献立設定をし、調理することが、二酸化炭素排出量削減に繋がるのかを考えます。この時、忘れてはいけないのは、見た目、おいしさ、栄養などの要素です。これらの質を落とすことなく、献立設定・調理をしていきます。また、設定した献立は、実習の授業の中で、実際に試作・試食を行うことで、実践を通し環境に配慮した調理について理解を深めていきます。

短期大学
生活科学科

小池 恵 助教



2015年共立女子大学大学院家政学研究科修士、博士(学術)。専門は、調理学・環境調理・食育。環境学習に関する研究では、調理時に排出される二酸化炭素を実測により見える化し、その削減法の提案を行った。博士論文は、調理実習における環境教育のための教材を作成し、教材を使用した授業プログラムの実施とその有用性について検討した。千代田エコシステム推進協議会主催の「エコレシピコンテスト」に卒研・ゼミの学生を参加させ、2014年には指導学生が最優秀賞を取った。

主な担当科目

環境調理学、調理実習Ⅰ・Ⅱ、フードスペシャリスト演習ほか



環境にやさしい調理の発表

実習の授業では、班ごとに考えた環境にやさしい献立の発表をします。実際に体験してもらうことで、環境問題を身近に捉え、温暖化防止行動に取り組みことができると考えます。

NEWS

共立アカデミー 2017年度開講講座のご紹介

江戸と東京、時間を越えてブラリ旅

江戸・東京 文学と歴史の ブラリ旅

江戸～現在まで、時間と空間を超えて、この都会を楽しむ小旅行に出かけてみませんか？

この講座では、古今と現代がとけあう江戸の空間や歴史、史跡などが残る東京を中心に、五感をフルに使って文学と歴史を楽しみます。魅力あふれる東京を歩いて時代と空間を共有しましょう。今回は、芝・高輪・品川を、ブラリ旅です。事前学習で見どころや背景を江戸の古地図や資料から読み解き、実際に歩いてみて一層その魅力をご堪能ください。



Navigator 内田 保廣

共立女子大学文芸学部名誉教授。専門は江戸時代の文学。情報処理関係の科目も担当しています。出身大学は慶応義塾大学。出身地は東京です。70歳になりました。

定員 ▶ 15名

日時 ▶ 5月25日 木曜日 17:00～18:30

事前学習

5月27日 土曜日 13:00～17:00

ブラリ旅テーマは「高輪台の高低差」です。

芝～高輪～品川をめぐるながら体感しましょう。

会場 ・事前学習：神田一ツ橋キャンパス

・ブラリ旅：(集合) JR新橋駅 (解散) 品川駅 予定

受講料 【在学生】1,000円 【卒業生】2,000円 【一般】2,500円

あなたを輝かせる「好感度UP!のマナー」を身につける!

世界共通のコミュニケーションルール 「マナー&プロトコール」の基本

「マナー」は、社会人としての必須要素です。国際化する社会の中で、世界共通のコミュニケーションのルールとして「プロトコール(国際標準マナー)」への注目も高まっています。相手に対する思いやりを自然でスマートに実践し、きちんと伝えるための基本的なポイントをお伝えします。対人関係で重要な第一印象を高めるための実践練習や、マナー&プロトコールの基礎知識の確認を行います。「好感度UP!のマナー」を身につけ、ご自身を磨いて“輝くあなた”に。8月の「マナー&プロトコール検定・3級対策講座」の内容についても解説します。



Navigator 西原 恵

日本航空株式会社客室乗務員として22年間乗務及び後進の指導・育成等を担当。2008年よりマナー講師として、企業・団体・学校・個人への研修を実施。大学・専門学校の非常勤講師も勤めている。モットーは「心を形に!美しいマナーでより良い人間関係を!」

定員 ▶ 30名

日時 ▶ 5月19日 金曜日 18:40～20:10

- ・マナーとは?
- ・プロトコールとは?
- ・第一印象の重要性
- ・マナー&プロトコールの基礎知識の確認

受講料：【在学生】無料 【卒業生】1,000円 【一般】1,500円

お問い合わせ窓口

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1
4号館学生課 共立アカデミー
TEL.03-3512-9981

▼ 環境学習への取り組みバックナンバーのご案内

過去6年分のパンフレットが、ホームページでご覧いただけます。



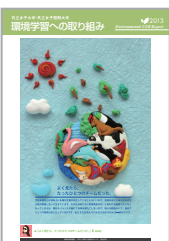
<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/about/outline/kankyo/index.html>



2011年度



2012年度



2013年度



2014年度



2015年度



2016年度

共立女子大学・共立女子短期大学 環境学習への取り組み 2017

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/>

編集：学生課 監修：国際学部 細野豊樹(教授)、生活科学科 三井直樹(教授)



古紙/パルプ配合率80%再生紙を使用